

WHO 執行理事会



2020年2月3日～8日、ジュネーブのWHO本部で第146回WHO執行理事会が開催され、中谷比呂樹当センター・ディレクターが議長を務めました。日本選出の執行理事が議長を務めることは我が国にとって初めての栄誉なことでありました。執行理事会は、WHOの最高議決機関で各国の保健大臣が参加するWHO総会の下部機関で、34名の執行理事によって構成され、毎年2回、年当初と5月に開催されます。そして、WHO総会への助言や提案、

WHO総会での決定事項の実施やWHO職員を監督することなどを主な役割としています。今回は、折からの新型コロナウイルス感染症の拡大の中、57に及ぶ議題（小項目を含む）が論議されました。その議題の中には Human resources: update（人材の最新状況：2019年7月末の数字を2018年の同時期と比較）に関する事務局長報告書が含まれていました。全文は http://apps.who.int/gb/ebwha/pdf_files/EB146/B146_48Rev1-en.pdf で見ることはできますが、その要旨は

- WHOの職員数は8,106人で2018年に比して2.2%増加
- 地理的な配分は本部30.3%、地域事務局24.8%、各国駐在事務所44.9%だが、幹部職員に限ってみるとその分布は、それぞれ50.2%、32.1%、17.7%と本部偏重
- 上記数字の他に様々な雇用形態の職員がおり、コンサルタントは、1,927人と前年比でほぼ倍増、短期雇用者も3,606人と約1割増加

従って、長期契約の常勤に拘らず、コンサルタントといった契約形態での雇用も視野にいと、採用の可能性が高まることになりました。

また、討議の中では、日本政府代表者から、邦人採用の促進を求める、その一環として採用ミッションを派遣いただけるなら歓迎する旨の発言がありました。

なお、中谷センター長は、ジュネーブ滞在中に、2020年に企画している各種活動に関して担当部門との協議を行いました。今後具体化した段階でお知らせいたします。

在ロンドン邦人留学生対象 グローバルヘルス人材戦略センター キャリア・ガイダンス

中谷センター長の訪欧に合わせて、2月11日 London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM) ピオット学長室をお借りして開催いたしました。LSHTM 在学生を中心に他大学留学生を含め15名の参加者があり、キャリアアップについて説明をし、その後、質疑に応じました。海外の大学での説明会開催は、昨年の米国ジョージタウン大学に引き続き2回目になります。今後も、センター長の海外出張の機会を活用して、邦人留学生の多い主要大学で開催する予定です。



■ お知らせ

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染に関する政府の基本方針を受けて、当センターでは時差出勤を始めました。午前10時から16時をコアタイムとし職員が勤務しておりますので、電話でのお問い合わせなどは、この時間帯にお願いします。また、ご相談は極力ビデオあるいは電話会議方式で行いますのでご協力をお願いします。

■ 人材登録のお願い

3月現在、約530名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになってきました。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。

<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際ネックになることが、ロールモデルになるような人物が身近にいなかったのがキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、また、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々がご帰国された際に熟練したインタビュアーにお願いして、キャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上に公開させていただくこととしました。

第2回は、ロンドン医療センター院長の伊原鉄二郎氏と、GHIT Fund 投資戦略 兼 ビジネス・ディベロップメント シニアディレクターの鹿角契氏です。

インタビュアー 清水眞理子

第2回



ロンドン医療センター
院長 伊原 鉄二郎 [いはら てつじろう]

1955年 東京都生まれ、18歳で単身渡英。1983年 ロンドン大学医学部卒業。1984年 家庭医研修医/伊原クリニック開業。1991年 ロンドン医療センター設立 (<http://www.iryocom/>)。2017年 香港診療所開設 (<https://www.iryohk.com/greeting>)。英国医師会会員、英国王室内科医学

会会員、英国家庭医学会登録医、香港医学会会員、欧州日本人医師会前会長。GP (総合家庭医) として診療診察に当たるとともに、将来の本格的な日本人家庭医の育成にも努力している。

私は小学生のころから世界地図、朝日年鑑の統計をみるのが大好きで、日本と同じ小さい島国のイギリスがなぜ7つの海を支配できたのか?いつか広い世界を見て回りたいと考えていました。

中学3年の時、高跳びの練習中骨折し入院、入院といっても足以外はたって元気で、となりのベッドのおじさんから、「これからは英語とロボットの時代だよ」と何度も聞かされ、英語の小説を読むようになりました。

退院後しばらく体育の授業に出席できませんでした。それまで運動は得意でしたが、出席できないことで成績評価は1。当

時の都立高校入試は内申書重視でしたから、理不尽な思いは消えませんでした。進学した高校で出会った先生のおかげで今があると思います。

イギリス人の書く小説を読み進めるうちに、彼らの話の展開、理屈がとてもおもしろく、これが大英帝国の世界制覇の理由だと思いました。本場へ行って英語を学びたい。英語ができれば世界をわたっていい仕事に就ける、狭い日本から出たいという気持ちが強くなりました。進路指導の三者面談で担任の先生が母に「この子は外国に行かせて広い世界で活躍させてやってほしい。」早慶合格は確実な成績でしたから、母は驚き反対しましたが、祖母が「私は琴も書も免許皆伝だが英語ができたらもっと世界が広がっていたと思う。行かせてやりなさい。」と背中を押してくれました。ブリティッシュ・カウンシルなどに相談に行きましたが、「自国で高等教育が受けられない途上国の人ならともかく、なぜ恵まれている日本から行く必要があるのか?」しかも当時は日本の高校卒業資格でイギリスの大学は受験できませんでした。それでも私はあきらめきれず、単身渡英、ロンドンで高校から再スタートしました。1974年のことです。

(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/ でお読みいただけます。)



**GHIT Fund 投資戦略/
ビジネス・ディベロップメント**
シニアディレクター 鹿角 契 [かつの けい]

1982年 札幌生まれ。2007年 東京大学医学部医学科卒業。2007-2010年 独立行政法人国立国際医療研究センター(前国立国際医療センター)総合診療科・救急部勤務。2010-2011年 ジョンスホプキンス大学公衆衛生大学院で公衆衛生修士号(MPH)取得(フルブライト奨学生)。2011-2012年 East-West Center アジア太平洋リーダーシッププログラム(在ホノルル)。

2012-2013年 世界銀行勤務(ヘルスペシャリスト)。2013年~現職。日本・米国(ECFMG)両方の医師資格を有する。東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻生物医学化学教室非常勤講師。日米リーダーシッププログラム・フェロー。

小学生のころ、NHK ドラマで「大地の子」を見て、日本と中国の狭間で揺れ続ける主人公の姿に純粋に感動し、「自分も何かしたいといけない。」という思いに突き動かされました。「日本人の自分に何ができるのか?」広い世界とのつながりを考えると歴史的に難しいことも多い中で、将来は外交や国際関係に関わる仕事がしたいと漠然と考えるようになりました。

中学生の時に、英語のスピーチコンテストに参加、入賞して姉妹都市オレゴン州のポートランドに数週間行く機会を得まし

た。すべてが新鮮であり、同時に文化的な違いなど、いろいろな場面で衝撃も受けました。英語でのコミュニケーションも最初はなることかと思いましたが、帰るころには不思議と自然に話しているような感覚があり(実際は、しどろもどろだったと思いますが)、さらに世界中の人と関わっていききたいという気持ちが強くなりました。高校の時には新聞社主催の環境エッセイコンテストに応募し、幸いにもオーストラリアのフレーザー島にてエコツーリズムを学ぶプログラムに参加する機会を得ました。

こういった機会を通じて、日本と世界の違いを肌で感じ、世界中どんな地域でも人が健康に生活できることが必要不可欠な要素であると痛感しました。そこで、私は医療という切り口から海外と関わり、「大地の子」をみて決意した「日本が世界に貢献できる」分野に進みたいと考えました。

大学入学後、特に最初の教養課程の2年間は大学、日本にとどまらずいろいろな国を訪れ、多くの人と出会う貴重な時間であったと感じます。

(続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/role_model/ でお読みいただけます。)